

1. この研修に求めたものと達成感について

私が本研修会に参加した目的は、世界最先端を行くスタンフォード大学の高磁場 MRI、並びに心臓 MRI における現状と将来を知る。総合的判断を基にこれから目指していく放射線学の今後を確認する。日本とアメリカの放射線技師について環境を含め違いを確認すること。また、この大きなチャンスを機に今後の自分自身の技術や研究のレベルアップへの糧としたいと思いついたことである。

この研修会に臨み、先ず偉大なる Michael Moseley, PhD の講義を受けその Exiting なプレゼンテーションにすぐさま彼の世界に引き込まれてしまった。高磁場 MRI の講義では 7T 装置の驚愕の高精細画像を惜しげもなく見せていただき、さらには放射線学の未来像として、分子イメージングと高磁場 MRI 等の融合に関する大変貴重な講義も受けさせていただいた。Francis Chan, PhD による Cardiac MR の講義では、胎児の心臓 MRI や以前から興味を持っていた 4D-Flow に関する内容が大変印象的であった。また、血管内の 4D-Flow のみならず、心臓さらにはステント開発や航空機エンジンの気流解析にも応用されていることを聞き、非常に有望な技術である事を再認識することができた。この他、病院、3D Laboratory、Sherman Outpatient Center (画像診断専門施設) 等の見学もさせていただき、そこに従事されている技師の方々のお話を直接伺うこともでき、大変貴重な機会を得ることができた。

2. 研修で出会った仲間との今後の関わりについて

共に参加した仲間との出会いもこの研修の醍醐味であると、以前に参加された方から聞いていたが、研修日程を経過するにつれ、その意味が本当に良く分かった。全国の各分野でご活躍されている方々との昼夜を問わない話し合いは大変有意義な時間であった。多忙な業務に追われながらも研究や研鑽を欠かさない皆様の姿勢は、今後の自分にとって大きな原動力になることは間違いないと実感した。この仲間との出会いは私にとって貴重な財産であり、そしてこのネットワークが今後、様々な局面で大きな支えになってくれるものと確信するところである。

3. 日本の放射線技師のあるべき理想像

日本とアメリカの放射線技師の違いを端的にいうと、業務の専門制の確立ではないかと思う。アメリカでは X 線撮影以外の CT, MRI, AG, US 等を行うためにはそれぞれライセンスが必要となる。制度化されたライセンスであることにより、各分野における地位、精度管理、技術等の向上には合理的である。それに対し、日本の制度はマンパワーの効率化の点で優れていると思われるが、両国における医療の最終目標に何ら変わりはなく、今後さらに加速することが予想される技術革新の中で、多種多様な業務を行っている日本の技師が真の力を充分に発揮するためには、国民から認知されるべく制度改革も必要ではないだろうか。

最後になりましたが、本研修にご尽力頂いた Stanford 大学、日本放射線技術学会、GEHC の関係者の方々、神戸大学の京谷団長、そして研修参加にご理解ご協力をいただいた当院中央放射線科技師諸兄に深謝いたします。また、常日頃から寛大な理解と支援をしてくれる家族に対し感謝いたします。有り難うございました。



Dr. Moseley より修了証を手渡され満面の笑み！